

脳死及び臓器移植の問題点

丸山孝雄

はじめに

身と心、身体と精神、肉体と靈魂の関係をどのように観るか、文化圏によってどのような相違があるか、現代に生きる人類として共通の身心観をわれわれは持つことができるかが、今回のシンポジウムの主題である。これは副題の「脳死・臓器移植の思想性を考える」上での基盤となるものであり、時恰も「脳死臨調」の中間意見発表の時期と前後し、思想の研究に携わるわれわれにとって「人の個体の死の認定」をめぐる最重要課題である。

このシンポジウムでは、医学・哲学・仏教学それぞれの立場から三人の提題者による基調講演が行われ、これについて私にコメントするよう求められたので、問題点を八項目に整理して極く短い見解を申し述べた。ここに改めて筆を加え「脳死及び臓器移植

の問題点」を提示したい。

一 身心観の諸相

市川浩・小川一乗両教授とも、西欧の身心観は身（肉体）と心（精神・靈魂）とを、二つの異なる根本原理と観る身心二元論（靈肉二元論）であるとす。そして市川教授は「キリスト教社会である西欧で遺体にたいする考え方が比較的ドライなのは、このような靈肉二元の考え方に原因があるのかもしれない」と指摘する。西欧の身心二元論の源流を尋ねるに、ギリシア哲学では、まずオルフェウス教の影響を受けたピュタゴラスの靈魂の輪廻説が挙げられよう。彼によれば、靈魂は不滅であるが、前世の罪のために、牢獄あるいは墳墓のごとき肉体の内に封じ込められ、死後も動物と人間の体に周期的に転生し、永い浄化の過程を経て、清浄

な者及び敬虔な者の靈魂のみが再生の輪廻から救われ、肉体を離れた精神の生活に立ち帰る、というのである。⁽¹⁾この思想はソクラテス・プラトンの身心観にも大きな影響を及ぼした。ここでは肉体を墳墓として蔑視し靈魂の浄化解放を説く思想がみられるのである。⁽²⁾

また『旧約聖書』「創世記」(二一七)⁽³⁾には「主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」と記されている。ここに、西欧において身体を単なる物質とみなす源泉がみられる。近世哲学の創始者の一人であるデカルトの身心二元論は後世に大きな影響を及ぼした。

市川教授は、西欧の身心二元論に対して、東洋、特に日本では「身心一体」観であるとし、身と心の用語例を吟味して次のように論ずる。

「身」においては、「頭」は特権的地位をもたない。(中略)
日本人のころもまた、頭ばかりではなく、心臓も、肝も、腹も、また意識の領域のみならず、無意識の領域をも含めた身の統合である。「身も心も」という場合の「身」や「心」は、二元論的な発想ではない。身心一体となった全存在をあらわす言葉である。(比較思想学会第一八回大会のレジュメより引用、以下同)

また小川教授は、西欧の身心二元論に対し、仏教では人間の存

在は(1)五蘊仮和合であって、縁起的存在であり、(2)「死すべき身」であり、(3)「迷いの生存」であって、仏教はそこから解放される道を説いている、とする。

二 人間の個体の死

人間を、人格的人間(人)と生物的人間(ヒト)とに分ける見方がある。人格的人間は人格をそなえ家族・知人等との人間関係をもつ社会的人間であり、その死は一人称の死(自分自身の死)・二人称の死(あなたの死)・三人称の死(他人の死)に分類される。生物的人間は器官(臓器)体系の統合体としての人間であり、その死は、これまで三兆候説によって判定されてきている。

三 脳死をもって人間の個体の死と認め得るか

脳神経外科医の福岡誠之博士は、これまで医師の三兆候説による死亡判定について家族から異議を申し出るものはなかったとし、「脳死」について次のように述べる。

ところが脳死患者は(中略)触れば温かく、一見して元気なときと変わらない。これまでの死のイメージとは全く異なるので、脳死であることを伝えても家族にはすぐに患者が死んでいると納得してもらえない。

家族にとっては患者は二人称で呼ぶ存在であり、「脳死」をもって「二人称の死」とは認め難いのである。福岡博士は「脳死患

者」「脳死状態の患者」という語を用い、「脳死は人の死であるか」と疑問を投げかけている。そして「脳死の判定」について、脳機能の停止を外から判断しなければならず、そのためには非常に複雑な検査を要し、第一線の救急病院では判定できない事態になる、といひ、「臓器移植」について、

臓器移植を前提として脳死を判定するのであれば、確実な判定基準であつて、しかもどこでも実施可能なものが、必要となる。(中略)また、判定に少しでも疑わしい点があれば、判定を保留して、時間をかけて経過を観察するようにしなければならぬ。

と述べ、脳死判定の難しさを指摘している。

市川教授は「身心一体」観に立脚して、人間の死はプロセスにおいてあり、死の判定は「万人に分かり、納得できるしるし(徴候)」と基準によらなければならない。とし、「脳死」及び「臓器移植」に関する問題点を指摘する。

また小川教授も「生と死との境界は厳密な意味では明確ではなく、(中略)『脳死』を人間の死とすることの問題性は、分断することのできない生と死を必要性を優先させて分断するその点にある。」と指摘する。

現代の日本においては、人間の個体の死を判定し、死亡診断書にその死亡時刻を記入するのは医師である。そしてこれまで死の判定は三兆候説に基づいて行われてきた。この場合、生物学的

の個体の死に重点が置かれる。家族・親族や知人は厳粛に患者の死にゆくプロセスを見詰め見送り、通夜・密葬・葬儀・初七日等を営み、その過程において徐々に人格的人間の個体の死を確認し受け容れていく。

しかし「脳死」の場合はどうであろうか。「医学的には、脳死をもつてヒトの個体の死と認定する」と主張されても、それをもつて人格的人間の個体の死とすることは受け容れ難いのである。

四 「脳死」と「臓器移植」

「脳死」と「臓器移植」とは、本来別個の問題である。政府の「臨時脳死及び臓器移植調査会(脳死臨調)」（永井道雄会長）の名称では「及び」という併列の意を表わす接続詞によって両者が結ばれている。しかし審議の方向は「臓器移植」を前提とした「脳死」問題の論議に傾いている。⁵⁾

三兆候説による人間の個体の死を待っていては心臓移植はできず、また最近生体肝移植も行われているが「脳死患者」からの肝臓移植等が期待され、「臓器移植」を前提とした「脳死」が論議されるようになり、「脳死移植」という用語すら使用されるに至った。

おわりに

「臓器移植」を前提とした「脳死」の問題を論ずる場合、イン

フォーモド・コンセント [Informed Consent] 十分な説明を受けた後の患者（及び家族）の承諾⁷⁾、リヴィング・ウィル (Living Will) 生前発効の遺言⁸⁾、自己決定権、法制化の問題点など論ずべき課題が多い。

市川教授が指摘することく、「立法化」には社会的強制力・普遍化・拡大解釈の不安がつきまとう。

わが国には「角膜及び腎臓の移植に関する法律」(昭54・12・18法63)があり、条件付きで死体からの眼球又は腎臓の摘出がでることになっている。この「死体」は「三兆候説に基づく死亡認定を受けた死体」であるが一般には解釈されるが、最近、「脳死状態の患者」からの腎臓移植が報告されている。拡大解釈は医の倫理としてもなされてはならず、敵に戒めらるべきである。

- (1) ツェラー著、大谷長訳『ギリシア哲学綱要』未来社、一九五五年、八三頁。
- (2) ツェラー著、前掲書、一九六頁。
- (3) 井筒俊彦、神祕哲学 第二部 神祕主義のギリシア哲学的展開、人文書院、一九七八年、一一〇頁「死の道」
- (4) 『聖書 新共同訳』財団法人日本聖書協会、一九八七年。
THE HOLY SCRIPTURES OF THE OLD TESTAMENT,
Hebrew and English, London, 1985, p. 3.
『新聖書大辞典』キリスト教新聞社、一九七一年、二八頁「アダム」。
- (4) デカルト著、落合太郎訳『方法序説』(岩波文庫) 岩波書店、一

九五三年、「第五部」特に七三頁。

島田輝子「生命の倫理を考える——バイオエシックスの思想——」(フイニクス選書) 北樹出版、一九八八年、一八頁。

高坂正顕『西洋哲学史』創文社、昭和四十六年、二三九頁「生命について」。

(5) 政府の「脳死臨調」は、われわれのシンポジウムの期日と前後して「中間意見」をとりまとめ(平成三年五月三十日、同年六月十四日)、平成三年六月十五日付の新聞にその内容が公表された。「脳死を人の死とすることに反対」の少数意見も付記されている。

(6) 唄孝一「臓器移植と脳死の法的研究」岩波書店、一九八八年、四〇九頁。

(7) 厚生省健康政策局医事課編『生命と倫理について考える 生命と倫理に関する懇談報告』医学書院、一九八五年、三一三頁。

日本尊厳死協会編『誰もが知っておきたい、リビング・ウィル』人間の科学社、一九八八年、一三頁。

(8) 厚生省健康政策局医事課編、前掲書、二七一頁。

(9) 『朝日新聞』(一九九一年五月三十日12版)二六頁「岡山協立病院」(水落理・理事長兼院長)で去年十一月、脳死状態の男性から腎臓を摘出し、患者二人に移植手術をしていたことが二十九日までわかった。(中略) 脳死腎移植はこれまで年間三十例程度行われてきたと推定されるが、今回の例は、政府の「臨時脳死及び臓器移植調査会」(脳死臨調)の中間意見が迫り、脳死を人の死と認めるかの論議が高まっているなかで実施された(以下略)。

(まる)やま・たかお、比較哲学・仏教教理史、信州大学教授